

実したレポートができそうな予感がしている。ただ、ちょっとだけ問題が……。

「ふ、文香ちゃんの家で？」

私は、電話の向こうの文香ちゃんにおそるおそる聞いた。「うん。大丈夫。お母さんもパートに行ってるし。綾乃ちゃんあやのは部活の後、最近ずつと外で遊んでるから。誰もいないんだ。だから、自由にできるよ」

「え？ あ、うーん。どうしようかな」

はつきりと「そうしよう」と言えないのには、理由がある。

前に文香ちゃんの家に行った時、私は、文香ちゃんのお母さんが再婚したばかりだという新しいお父さんとばったり出くわした。そして、その人は、なんと、私のお父さんだったのだ。私が、赤ちゃんの頃、お母さんと離婚したというお父さん……。

またお父さんに会ったら、どうしよう。

この前は、自分のお父さんだったと知らなかったから仕方ないけど、真実を知ってしまった今、私は、どんな態度であの人に会えばいいかわからないし、なんだか怖い。それに、文香ちゃんは、このことを知っているのだろうか。ううん、きっと知らない。だから、私のことを「うちにおいでよ」なんて気軽に言うことができるのだ。

それに、もし、文香ちゃんが本当のことを知ったら……。

——「今までよりもほんの少し距離をおいたら？ ユナだって気まずいじゃん。友だちのパパが自分の父親おとうたなんて」

前に、お母さんが言ったことを思い出して、胸がドキンとした。あの時は、そんなことないつつぱねたけど、もしかして、お母さんの言っていたことは正しかったのだろうか。私は、文香ちゃんとは仲よくできない運命なの？

そんなの……嫌だ！

「児童館は？」

私は言った。

「児童館の学習ルームがいいと思う。あそこは自由に机を使っていいし、カラーペンとかも貸してもらえるよ」

「あ、それ、いいかもね」

文香ちゃんがそう言ったので、私はホッとした。結局、明日は児童館で午後一時に待ち合わせすることになった。

その夜、寝る前に私はお母さんに抗議することした。

この前、うちに文香ちゃんが来た時のお母さんの態度についてだ。

「文香ちゃん、気をつかって「うちにおいでよ」って言ったんだ。お母さんのせいだよ！」

「えー、なんで？ そんなのわかんないじゃん」

「わかるよ。だって、この前、お母さん、文香ちゃんにツンツンしてたもん。言わないけど、きっと嫌だと思ったん